

北前船のまち直江津

上越市地域の宝

北前船がばこんだもの



日本遺産

荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～

上越市の北前船の記憶が、平成30年、文化庁の日本遺産 (Japan Heritage) として認定 (45市町) されました。「日本遺産」とは、地域の歴史の魅力や特色を通じて文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するもので、ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる様々な有形・無形の様々な文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけではなく海外にも発信することによって、地域の活性化を図ることを目的としています。

上越市では、直江津の町並み・八坂神社・琴平神社の石燈籠・住吉神社奉納物・米山・北前船関連資料・旧直江津銀行 (ライオン像のある館)・海上信仰資料 (船絵馬・市指定文化財) 直江津・高田祇園祭の御旅所行事と屋台巡行 (県指定文化財)・米大舟 (民謡踊り) の10の構成要素からなっています。



直江津までのアクセス

- JR北陸新幹線 (はくたか)
- 東京から 約2時間10分 / 東京駅→上越妙高駅→(えちごトキめき鉄道)→直江津駅
 - 長野から 約35分 / 長野駅→上越妙高駅→(えちごトキめき鉄道)→直江津駅
 - 金沢から 約1時間20分 / 金沢駅→上越妙高駅→(えちごトキめき鉄道)→直江津駅

企画・発行

まちおこし直江津

代表・佐藤和夫 ☎090-4373-4066

定期的に「まちあるき」を行っています (上越市のホームページで検索を)

イラスト・ひぐちきみよ / デザイン・ムロハンデザイン

保坂清美・江塚友之・市村久子・小松光代・坂井芳美・ひぐちきみよ・小股郁子

このガイドマップは令和3・4年度上越市地域活動支援事業 (直江津区) の採択されたものです。

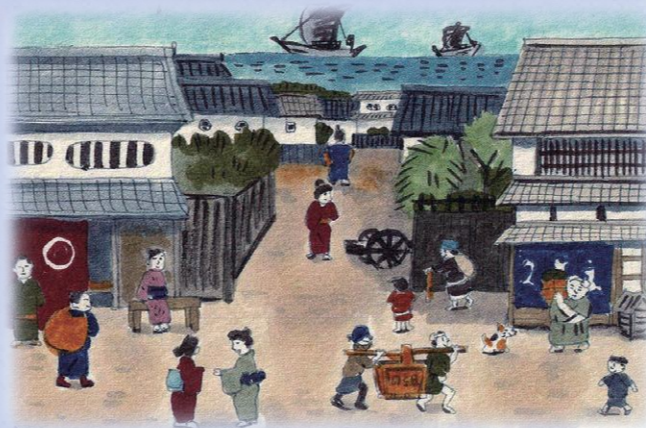
物流基地 直江津

直江津は、室町時代に成立した日本最古の海洋法規集である「廻船式目」に、三津七湊の七湊の一つに登録され、郷津 (国府の津) という地名が残るように越後国府の港、越後守護上杉氏、上杉謙信・景勝の時代にも財政を支える港として手厚く保護されていました。このような直江津は、「安寿と厨子王」などの中世の物語に「直江の津」あるいは「直江の浦」として登場し、東西日本の海陸の物流・文化の接点として描かれています。

江戸時代になると高田藩政下に置かれますが、北前船による急激な流通経済の発展は、物流基地として多くの廻船問屋や遊郭を出現させ、経済的自立と町衆文化を开花させることになりました。

明治時代に至って、汽船の登場と電信による素早い商品相場情報によって、北前船の繁栄は一気に衰退したと言われています。

しかし直江津では逆に正確な情報収集と産地直航が可能になりました。明治26年に全通した唯一の列島横断鉄道であ



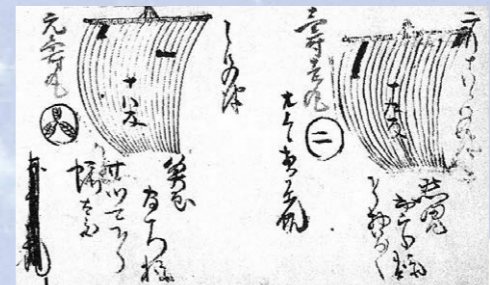
る信越線本線は、関東一円、篠ノ井線経由で松本や伊那谷への物流の大動脈としての役割を果たし、港湾機能が脆弱にもかかわらず、直江津は日本海側の重要な物流基地の一つとなりました。

直江津には、北陸に見るようないわゆる船主の豪邸が残っていないのは、「大火のまち」で残らなかったと言うだけではなく、物流業としての機能的な施設 (建築物) への変貌が要請されたためと考えられています。また直江津から8kmも内陸の大地主が2艘の船を所有していて、船主は港近くにいる必要がなかったのも理由の一つと言えます。



直江津から積み出した物、運ばれた物

出雲崎町の廻船問屋熊木屋・泊屋さんの海運史料を見ると、直江津の船の積み荷の種類多さに驚きます。これらは直江津だけではなく、瀬戸内海や日本海側の各地、北海道へと運ばれています。そのなかで北海道から直江津に運ばれた身欠きニシン・メ粕・昆布・新巻きサケ、瀬戸内海の塩・綿・古着は、関田山脈を越えて飯山の千曲川にある「川の港」から信州の各地へ送り出さ



熊木屋に残された「永代客船帳」[出雲崎町史・海運史料集1]より船名・家紋・船主・船頭・石数・積み荷がわかる



「川の港」の写真より

れました。直江津から積み込んだ物は高田藩や幕府領の「御蔵米」が中心だったようですが、面白いのは、熊木屋さんの史料には上越地域の100余の酒蔵と酒の名前があることです。

また、直江津には北前船によって運ばれた笏谷石や御影石の製品が数多く見られ、「上越市地域の宝」に認定されています。



廻船問屋が年始に得意先へ送った「引き札」



北前船が伝えた「米大舟」

北前船の船頭が大潟の人達に伝えた「酒田節」が、地域ごとに歌詞を変えながら歌いつがれた。

北前船とは

幕府は酒田から幕府領の米を江戸へ回漕するため寛文12年 (1672)、江戸の商人河村瑞賢に請け負わせ、日本海を走り瀬戸内海を通過して江戸に向かう「西回り」と呼ばれる航路と寄港地などを策定させました。それまでは敦賀や小浜から陸路に変え、琵琶湖を再び舟運で天津から淀川経由で大阪方面へ輸送するという手間と高額な運賃のかかるものでした。

この西回り航路に船足が長く少人数で帆走 (帆のみで走る) できる「弁才船」と呼ばれる廻船が登場することで、北国の産物が一気に関門海峡を越えて瀬戸内海へ、上方の物産が日本海へ出ていく時代が始まり、それを「北前船」と呼ぶようになりました。「北前」の意味には諸説ありますが、また「きたまえぶね」ではなく「きたまえせん」と呼ぶこともあります。後に千石積みの大型船が現れると北前船 (弁才船) そのものを「千石船」と呼ぶようにもなりました。

1石の重さは約150kg、千石は150t。1俵60kg



北前船がもたらした京都名物

冬の京都の栄養補給に身欠きニシンを甘露煮にして乗せたにしんそば。

の米俵を2500俵積めることになります。

北前船は瀬戸内の塩や衣類を積み、途中で米を積み込んで北海道へ、北海道からは身欠きニシンやコンブを運んできました。肥料としてもたらされたニシンのメ粕は、綿や菜種油の一大産地を生み出すことになりました。

北前船の特徴として依頼品を運ぶだけではなく、船頭の裁量によって売買しながら航海する「買積み」商法によって、運賃よりも格段に多い利益を上げ、船主に莫大な富をもたらしました。



参考「水運史から世界の水へ」

船で運ばれた石材

北前船で運ばれた笏谷石や御影石は船の喫水を下げて転覆を防ぐために積み込まれたとい

われていますが、よく見ると製品や注文品として運ばれたようです。

笏谷石

福井市の足羽山から産出する凝灰岩 (火山灰の堆積)。美しい緑色で越前青石ともいわれ、加工しやすく耐火性に優れています。

市内には直江津地区のほか、林泉寺の川中島合戦戦死者供養塔、高田寺町天崇寺の高田

藩主松平光長の母勝子と初代高松宮妃寧子の墓所も笏谷石で荘厳されています。

現在、塀などに使われている緑色の石は、栃木県の大谷石で明治以降に鉄道で運ばれたもので、表面が荒く大きな気泡が特徴です。

御影石

神戸の六甲山の花崗岩で、御影港から出荷されたので御影石と呼んでいます。現在は同様の花崗岩も御影石と呼ぶこともあります。

直江津には江戸末期から明治時代の尾道産御影石の灯籠を多数見ることができますが、それには奉納者と石工の名前が刻まれている、注文品であることがわかります。また、八坂神社参道の御影石は昭和3年ころ敷かれたもので、一枚の大きさとは量は上越でもまれにみるものです。



石工の名前が彫られた灯籠の台座 備後国尾道 石工 木田秀介